

Title	ジュール・ヴェルヌ『カリフォルニアの城：転石苔を生ぜず』その3 (翻訳)
Sub Title	Jules Verne, Les Châteaux en Californie : Pierre qui roule n'amasse pas mousse, Scènes XVIII-XXVI (traduction)
Author	新島, 進(Niijima, Susumu)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.75 (2022. 10) ,p.65- 84
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20221031-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジュール・ヴェルヌ

『カリフォルニアの城——転石苔を生ぜず』

その3 (翻訳)

新島 進 訳・解題

1852年に発表されたジュール・ヴェルヌ若き日の戯曲作品。詳細は連載第1回目（本誌49/50号、2009年）の解題に記したのでくり返さないが、訳出の主眼は、本戯曲とレーモン・ルーセルが用いた独自の創作方法〈手法〉とのあいだの関係を明確にすることにある。そこで注目すべきは、作品の副題になっている諺「転石苔を生ぜず」と、最後の一文「さまよえる父は苔（＝財産）を集めない」がほぼ同じ一文でできていること（*Pierre qui roule n'amasse pas mousse / père qui roule n'amasse pas de mousse*）、また、女中カトリーヌの台詞のほとんどが諺や慣用句のもじりでできている点である。

今号での訳出箇所は作品終盤、第18場から最終場の第26場まで。加えて、これまでと同様、カトリーヌが用いた地口を一覧表にして付す。

第1場～第17場のあらすじ——パリの建築家デュブル氏は一攫千金を夢見、ゴールドラッシュに沸くカリフォルニアに旅立った。3年後、デュブル夫人は夫から帰国の知らせを受けとる。周囲の誰もが、氏がほかの金採掘人たちと同様、悲惨な末路をたどったに違いないと考えているなか、夫人だけは夫が大金を持って帰ると信じて疑わず、すでに借金をして豪華な衣服を買いこみ、帰国祝いの会を盛大に開こうとしている。

そんな折、青年アンリが、デュブル家の長女アンリエットとの結婚を申

しこみにやって来る。二人は相思相愛の仲にあったが、夫人は、百万長者になったアンリエットを貴族に嫁がせると言ってきかない。清貧なアンリエットはただアンリとの結婚を望んで財産に興味はなく、嘆き悲しむ彼女をデュブール家の女中カトリーヌが慰める。アンリも結婚を諦めず、来るべき破産から一家を救うため、カトリーヌに協力を請い、あることを画策する。

一方、カトリーヌにも、やはりカリフォルニアに渡ったまま行方不明になっている甥アレクシスがいた。カトリーヌの娘で、やはりデュブール家に仕えているクララは、従兄弟にあたるこのアレクシスを好いていた。彼はデュブールと同じ船でアメリカから帰国しており、寄港地ナントに数日留まったデュブールよりひと足早くパリに着くと、仰々しい物腰でデュブール宅を訪問する——その理由はまだ明かされない。カトリーヌがとり次ぎをするが、二人は不審を抱きながらも相手が伯母、甥であることに気がつかない。

そんななか、デュブールがついに帰還する。デュブールはすっかり落ちぶれ、みすぼらしい格好をしており、カリフォルニアで夢破れたあと、金銭への執着を捨てたと開き直っている。夫の金をあてにし、すでに散財していた夫人はとり乱す。実際、商人たちが支払いを求めて家に押しかけて来たが、デュブールは平然としており、夫人は夫の正気を疑う——以下、実はデュブールが妻にひと泡吹かせるため、芝居を打っていたことを明かすシーンから。続いて、ロシア貴族サルシフィコフと身分を偽っているアレクシスが、カリフォルニアからの帰途、デュブールと船上でおこなった、ある約束の内容が語られる。

第18場

デュブールひとり

デュブール：(大笑いしながら) ああ、ああ、ああ、かわいそうに！ これ
で頭も冷えたろうが、ちょっとやり過ぎたかもしれん。出て行ってくれて
よかったわ。もう少しでわしの秘密が漏れそうであったし、そうになったら、

せっかくの大どんでん返しが台なしになっただろうからな。わしが破産？破産だって？ この先もずっと金持ちであるのに。この財布には、今夜、割り引かれる大金が入っているというのに！ ああ、運ってやつだな。これまでわしに背を向けてきた運が、彼の地でわしに手をさし伸べたのだ。そう、運ってやつだ、まさに。なにせ、わしが身を投じたのは狂いも狂った投機ばかりだったし、危険極まりない取引ばかりだったからな。（興奮して）そして、この運気はまだ尽きていない、そういう気がする。おお、ここでわしは、向こうでつくった資産を運用して、三倍にも四倍にもしてみせるぞ、もう額もわからなくなるくらいまで。さあさあ、妻よ、お前はわしに満足することになるうて。そしてアンリエットよ、お前は一週間後には王女と呼ばれよう、その名は……おっと、ちょうどあの男が来た！

第 19 場

デュブール、アレクシス

アレクシス：（先の二回と同じ所作で）デュブール男爵はご在宅かな？

デュブール：おう、あれがその親愛なる王子さまだ……。

アレクシス：（デュブールとわからず）デュブール男爵をお願いしたいのだから？

デュブール：（お辞儀をして）私がそうですよ。こんな切れっ端のようなものしか身につけておりませぬことをお許してください、殿下。

アレクシス：（うしろに下り、じろじろ見ながら）貴公が、デュブール！ ああ、なんと！ その変わりようはまたどうしたわけだ？

デュブール：驚かせようと思ひましてね、王子。ほんの思いつき、ある種の人間観察ですよ。たった今戻り、落ちぶれた姿で家族の前に現われてやろうと……。

アレクシス：（荒々しく）ここだけの話、貴公は破産などしてまいな……
実際には？

デュブル：（笑いながら）破産するなんて難しいでしょうし、運命だって何事かと思うでしょう。（財布を引っぱり出して）私の大金はここに。

アレクシス：そいつを手にとらせてくれたまえ（両手で財布を握りしめる）。では数日のあいだナントに残っていたので？

デュブル：おっしゃるとおり。サルシフィコフ殿、私は貴殿ほど自由ではないのですよ。お目にかかったのは〈ケレス号〉の船上でしたな。王子である貴殿はアメリカからお戻りになる旅の途中であった。行きと同様、金持ちであられて……。

アレクシス：まさしく。余興で大洋をめぐっていたのだ。

デュブル：ですが、私めには、ナントで片づけなければならない事業があったのです……。ああ、おしめをしていた頃の私は富にあやされてはおりませんでした。殿下とは違うのですよ、生まれつき今の境遇にあらせられる貴殿とは……。

アレクシス：私が？ 私は子どもの頃のことなど覚えてもおらぬぞ。思うに私は、この世に生まれて来たのではなく、この世が私のほうにやって来たようだ。私は端から、この生き活きとした目、この貴族的なふるまい、この整った顔だちをしていたのだろう……（一回転してみせる）。

デュブル：それを口にされるには及びません。私は貴殿を、25歳の貴殿を見るや叫びました、「王子がここに！」と。

アレクシス：だが、男爵、貴公もなにやら高貴な血の香を漂わせておる……。

デュブル：事実、人は私を、実に由緒ある家の出だと言って憚りません。

（独白で）なにせアダムとイヴの子孫だからな……女たちを介して。

アレクシス：（ぞんざいに）そうなのだ、われわれ大貴族は、ひと目でそうと見分けのつくなにかを持っておるのだ。私の友たちが断じるには、よいか、私はロシア大帝エカチェリーナの血を引き、一日に食する千人の農民を有しているそうだ^[1]。

デュブル：千人の農民ですと、なんと！ それならば金になる事業を興せるでしょうな。その農民どもを開墾することもできましょう……。つまるところ殿下、光栄にも貴殿をわが婿に迎える日が来ましたら、ともに

億万長者になることにいたしましょう。金、それがすべてです。榮譽、尊敬、美德なのです！ 世界が聖人と認めるのは金です。五百万が大聖人ってところでしょうか？

アレクシス：（笑いながら）大いに結構、大いに結構。で、私はいつ、光栄にも娘さんを紹介してもらえるかな？

デュブール：すぐにですよ、王子。ですがまず、わが娘は事の真相を知らねばなりません、そして私の新たな財産のことも。

アレクシス：かもしれん。私は私自身を認めてもらいたいのだ。貴公の娘の心が誰かのものでないのは確かなのだな？

デュブール：言うまでもなく……。

アレクシス：ならば、すっかり私のものになるのだな？

デュブール：心とは、人が結婚と呼ぶ合資会社の資本です。その全株式を取得した者が唯ひとりの社主となりましょう。

アレクシス：男爵、貴公はひどく芯の強い人物だ、幸福をなすのは金だと達観しておられる。

デュブール：金、そして、それをどう使うかです！

アレクシス：（混乱して）では、なぜ貧者は幸福でないのか？ なぜなら金がないからだ。もしも金があれば貧者ではないはずだ。そして貧者でないならば……金があるはずだ……。言いたいことがわかるか？

デュブール：完璧に。

アレクシス：義父^{ちち}上殿、ひとつ忘れておった。貴公にはこの地で二、三の改革をしてもらう必要がある。

デュブール：私は邸宅、馬、馬車を買きましょう。

アレクシス：それから従僕どもを総とっ替えし、もっと品のいい召使いを持ちたまえ……。実は、私はすでにお宅に何度かうかがったのだ。

デュブール：（頭を下げて）殿下……。

アレクシス：そのときの炊婦だかの応対が酷かったことときたら……（独白で）例の、あの声をした……。

デュブール：カトリーヌと申す者だったと思います、ブルゴーニュのオー

セール出身でして。

アレクシス：(独白で) カトリーヌ！ オーセール！ なんと、あの声に間違いはなかった。あれは私の伯母だ！

デュブル：呼びつけて、貴殿の目の前でお払い箱にしましょう。

アレクシス：(怖がり、デュブルをひき留めて) 私の目の前で！ いいや、それには及ばん。それは無礼であろう……。ここで二度と顔を合わせる事がなければそれでいい。ああ、そうしていただきたい、本当に。すまぬが、どうしてもそうしていただきたい……。これは神経に関わる問題で……。

デュブル：では、殿下がここにいらっしゃるあいだ、あの女を使い遣りましょう。そして帰ってきたら追っ払います、二度と戻らぬように。

アレクシス：(独白で、息をつきながら) それでよし。(声に出して) さすれば以後、礼節を保てよう。ああ、将来のサルシフィコフ王女にお目通りするのが待ち遠しい！

デュブル：誰か来た！（舞台奥のドアのほうに向かいながら）妻だ！ 殿下、私の部屋にお越しく下さい、こいつを脱いで蛹のような姿とはおさらばしますので、そうしたらまた戻ってきましょう。(あれこれとお辞儀を交わしながら、舞台右手から退場)。

第20場

デュブル夫人、アンリ（舞台奥から入場）

アンリ：奥さま、ご家族が蒙っている不幸を知り、私はすぐさま、自分の持てるすべてをみなさまにお役立ていただきたいと考えました。

デュブル夫人：(扇ぎながら) ああ、アンリさん、破産とはなんとおぞましいものなのでしょう。ああ、こんな衝撃、私はもう立ち直れない。

アンリ：ひと握りの力と強いお気持ちがあれば、どんな絶望的な状況からだって脱することができるはずです。

デュブル夫人：絶望的であるばかりか、打つ手もなく、もうどうにもならない状況なのよ。

アンリ：（執拗に）奥さま、どうか私にお任せください、みなさんを目覚めさせ、みなさんのために働きます。なぜなら私は未来を信じているからです。私にお任せください、みなさんが今日を憂うのではなく、明日を夢見ることができるようにいたしますから。とりわけ、不幸な目に遭われたデュブル氏の痛みを和らげてみせます。

デュブル夫人：夫なんて！　ひとりで勝手に痛みを和らげていればいいのよ、本当に！　私にとって致命的なのは、まさに夫の無頓着さなの。こんなに恐ろしい災難を、あんなにも楽しげに受け入れているなんて。おお、男ってのは！　レースやカシミアをもう身に纏えないなんて、それに慣れることなどできそうにないわ……一度も身に纏ったことがなかった者が……これからそうしようとしていた矢先にこんなことになって。

アンリ：ですが、奥さま、お願いです、返事をください。時は迫っています、わずかな遅れも命とりになりましょう……。奥さま、受け取ってください。お子さま方の名にかけて……。

デュブル夫人：アンリさん、私、本当にどうしたらいいのか……（躊躇している）。

アンリ：おお、ありがとうございます、嬉しいっらない。では、ひとつ走りしてきます……。 (いったん退場)。

第21場

デュブル夫人、アンリ、アンリエット

アンリエット：（舞台奥に姿を見せ）やめて！　アンリさん、それはいけません！

アンリ：お嬢さま……わかっていただけたのでは……。

アンリエット：いいえ。確かに、私宛のあなたからの手紙はカトリーヌから

受け取りました。

アンリ：ええ、カトリーヌに託しました。

アンリエット：お母さま、読んでください。

デュブル夫人：「お嬢さま、もしも貴女から遠く離れるしかないのであれば、もしも私の悲しい予感が現実になるのであれば、せめてわずかなあいだだけでも、貴女が貧困に押し潰されることがありませぬように。それを確かにするため、この国債証券によって私の持てるすべてを貴女の足元に投げだすことをお許しください……」（手紙を落とす）。ああ、なんて立派な青年なの！

アンリ：（勢いよく。証券を拾いあげ、さし出しながら）さあ、奥さま、お嬢さま……。

アンリエット：（高貴な態度で）アンリさん、私どもは破産しました。あなたのそのすばらしい自己犠牲に感謝し、全生涯を捧げてあなたを幸せにすることができるならば、どれほど私は幸せでしょう。そして、もし父が、いくらかゆとりのある暮らしをもたらしてくれていたならば、母は言うでしょう——どうぞ娘の手をお取りください、と。そして私は、心の底から喜んでその言葉に耳を傾けることでしょう。

アンリ：お嬢さま……。

アンリエット：ですが私は、あなたを結婚させるわけにはいかないのです、祓いようもないこんな災厄などと。救いも希望もない一家をあなたに背負わせるわけにはいかないのです！

アンリ：（熱をこめて）では、私の愛情を、そしてこの気持ちをあてにしていだけないのですか？

アンリエット：愛する人に私の不幸を押しつけることなど耐えられません……。

アンリ：（彼女に走り寄って）アンリエット、天の名にかけて！

アンリエット：（真剣な顔で）いけません。（証券を、これを最後と押し返して）さようなら……。

第22場

デュブール夫人、アンリ、アンリエット、ポール、マルグリット、クララ
(彼らは舞台奥から入場)

子どもたち：わあ、お兄ちゃんだ！（アンリのほうに駆け寄り、アンリは悲しそうに子どもたちを抱き締める）。

クララ：（動転して）奥さま、お嬢さま、向こうに婦人服屋、帽子屋、タピスリー屋、ショール売りがおりまして、奥さまにお目通りをしようと地獄のような騒ぎを起こしています。母は、旦那さまの手紙を持っていったきり……。あたいには、あの連中が入って来るのを防ぐことができませんでした。

デュブール夫人：（独白で）ついに来たわ！（声に出して、じれったそうに）いいわ！ 待っているのなら……私が行きます……私が……。

クララ：（小声で）支払いが済むまでは、ここから出て行かないと息巻いてます。

デュブール夫人：どうしましょう！ どうしましょう！

アンリ：私にお任せください、奥さま！ ではのちほど、お嬢さま！

アンリエット：アンリ、さきほどのことは命令よ……。

アンリ：ならば従わないままでです。（クララについて、足早に出ていく）。

第23場

デュブール夫人、アンリエット、ポール、マルグリット、続いてクララ（デュブール夫人とアンリエットがうなだれて見つめ合っているあいだ、子どもたちは部屋のあちこちを走り回り、いろいろな物に触れ、最後に、舞台の前に置かれていた父親の古い旅行鞆を開ける）



アンリエットとクララ（第23場）「ダイヤモンドですわ、お嬢さま！」

アンリエット：（涙を拭いながら） ママン、お父さまは疲れ切っていたわ
……せめて昼食だけでもできているかしら？

デュブル夫人：（半狂乱で） どう……どうなのかしら……。

アンリエット：（独白で） おお、辛いわ。アンリはなにをするつもり？

デュブル夫人：カトリーヌを呼んで訊かないと……。

アンリエット：忘れたの？ カトリーヌは出かけているわ。（呼びかけて）
クララ！ ああ、そうだわ、私が自分でお父さまにお食事を出します……。
これからはそういうことにも慣れていかなければ。（力強く）いいわ、規
律と強い気持ちで私たちは、今のこのどん底から這い出してみせるわ。

デュブル夫人：ああ、神にお前の声が届きますように。

ポール：（アンリエットが通り過ぎるのを止めながら） おお、これきれい！
ほら、アンリエット。

マルグリット：ママン、これ見てよ（彼らは旅行鞆からさまざまなものを取り
出す）。

デュブル夫人：（驚きに跳びあがって） カシミアだわ！

アンリエット：宝石箱だわ！

クララ：（箱のところに走り寄って） ダイヤモンドですわ、お嬢さま！ ア

クセサリーが揃いであります！

デュブル夫人：レース！

アンリエット：ああ、震えてきたわ。これは……。

デュブル夫人：（我を忘れて）娘や、そうなのだよ、これがあの人の……

狙いだったんだわ……。財産が戻ってきた……。おお、頭がどうにかなりそう。おかしくなりそうよ。ああ！（有頂天になって娘を抱きしめる）。

アンリエット：（勢いよく）クララ！ 止めに走って……アンリさんに知らせるのよ……。 （クララ、退場）。

第 24 場

デュブル夫人、アンリエット、ポール、マルグリット、デュブル、アレクシス（デュブルはさきほどとはまるで別人のよう。アレクシスと一緒に舞台奥から入場）

デュブル：（妻に）君を苦しめてしまったが、許してもらえるだろうね？

デュブル夫人：（叫び声とともに）私たちはお金持ちよ！ ああ、幸せで死にそう！

デュブル：（家族を抱きしめながら）妻よ、かわいいアンリエットよ、子どもたちよ。そうだ、私たちは金持ちだ、百万長者の金持ちだ！

アンリエット：ああ、その語が私の心臓を突くのはなぜかしら。

アレクシス：（アンリエットをじろじろ見ながら）悪くない、悪くない。

デュブル：（妻に）さあ、妻よ、このインド産のカシミアを羽織ってみなさい。さあ、アンリエットよ、そのきれいな額に宝石をあててみなさい。

子どもたちよ、この魔法の旅行鞆からお宝をとり出すんだ。なくなっても、また出てくるんだからね。

子どもたち：ありがとう、パパ！ ありがとう！ ありがとう！（首根っこに飛びつく）。

デュブル夫人：（着飾りながら）どれもきれい、どれも煌びやか。デュ



まるで別人のようなデュブル氏（第24場）「旅行鞆からお宝をとり出すんだ」

ビューッソンさんの光は消え失せた！ 私としたことが、あなたの天分を疑っていたなんて。ああ、あなた、私を赦して！ 赦してくれたなら私たちの幸せは完璧になるわ。

アンリエット：私たちの幸せ！ ああ、それは誰にとってもそうだと？

デュブル：^{ぜんしよくゆう}全贖宥 [カトリックの教義で罪を赦すこと] を出すよ。だが、まずは妻よ、婿殿を紹介させてくれ、そしてアンリエット、お前には夫君を。

アレクシス：（挨拶をし、じろじろ見ながら）奥さま、お嬢さま……。 （独白で）悪くない、悪くない。

デュブル：（仰々しく）こちらはアレクシス・サルシフィコフ王子殿下だ。ロシア大帝エカチェリーナの後裔で、ニコライ陛下の覚えめでたい貴族であらせられる。

デュブル夫人：（ますます狂乱しながら）貴族ですって！ 娘が貴族になる！ 今度ばかりは頭がくらくらしてきたわ。殿下、結婚して下さるので？ ああ、なんてすばらしいの！ お手を、婿殿。

アンリエット：（打ちひしがれて）おお、母の心にはアンリの面影などない！

デュブール：見てのとおり、こちらの殿下に比べたら、私がカリフォルニアから持ち帰ったものの価値など知れたもの。

アレクシス：（氣どって）ああ、奥さま、お近づきに……なれて……嬉しく思うぞ。帰国のあいだ、男爵殿は自身の地位と娘さんのことを長々とお話ししてくださってな。そのどちらもが私にはびたりと合っておる。

デュブール夫人：天に祝福あれ！ ロシアの王子さま、私どもに毛皮を送ってくださいな。私、毛皮が大好きです。本物の貂の毛皮でできたマフが入り用なものですから。デュブユイツソン夫人のは偽物なのよ。知らなかった、アンリエット？ お前には、オコジョのタルマ〔ケープの一種〕をつくらせるわ。まずは、ねえ、あなた、あなたの帰国を盛大に祝いましょう。あなたが成功して戻ってくることは百も承知だったのよ。成功を祝ってあなたを華々しくお迎えする準備を万全にしておいたの。街中の人を晩餐に招くわ。ああ、みな同席するのよ、デュブユイツソン夫人も！ デュブユイツソン夫人も！ ロシアの王子サルシフィコフ閣下も！

アレクシス：奥さま、お近づきに……なれて……ますます嬉しく思うぞ。

デュブール夫人：（呼びかけて）カトリーヌ！ カトリーヌはどこ？

アレクシス：（独白で）ああ、なんてこった！

デュブール：カトリーヌは使いに出ている。だが、戻ったら暇を出そう。あのような召使いは、もはやわしらのような位の人間にはふさわしくない。いいか、サンフランシスコでは、銀行家どもが文句のひとつも言わずわしにかしずいていた。わしの四輪馬車の後ろに乗るのを恥とも思わずにな。（発作を起こしそうになるまで、ますます興奮して）おお、わしはな、金が万能であるあの国で万能だったのだ。あそこでは財産が奴隷になる感じがした。わしには、なんと現実離れした投機が合っていたんだ。わしは衣料品、食品、住居、坑夫どもの息を売り買いた。金脈のある広大な土地を買い、そこで採掘したのは信用と敬意だった。わしは、あの燃える大地に落ちる雨、そして船舶を旧世界に運ぶ風を手中にした。わしは投機の権化と化したのであり、この力をもっと広く、もっと実り多い地で発揮するためここに戻ってきたのだ。わしはパリにサンフランシスコの土地を移

して、金探しが旅の危険を冒さずに済むようにし、セーヌの川床にサクラメント川を流したいと思っておる。ひとこと言えば、カリフォルニアの山々を一塊いくらで買い、フランスに持ってきて、首都の真っ只中で採掘をするつもりなのだ！ ヨーロッパ中の者たちが私から株券を買うだろう。ニコライ大帝は株を手に入れるため私に跪くであろう。ではないですか、サルシフィコフ殿？

デュブル夫人：ああ、あなた、キスをして、もっと！ もっと！ 婿殿も、キスを……。すばらしいわ、生まれながらの貴族だなんて。これから私もがなにをするかわかりになって？ 明日、オペラ座のいちばんきれいなボックス席を押さえますの。そして「さまよえるユダヤ人」の上演に、みなで正装をして現われますの。それが私たちの社交界入りよ！（この場面のあいだずっと、アンリエットは悪い夢を見ているかのように放心したままている）。

第 25 場

デュブル夫人、アンリエット、ポール、マルグリット、
デュブル、アレクシス、アンリ

アンリ：（舞台奥から入場）奥さま、もうなにも恐れることはありません。

こちらが伝票です。私が支払いを済ませたことをお許しください。

デュブル夫人：（しまったという表情で）はあ、それはなんですか？

デュブル：この方はなにを？

アレクシス：（じろじろ見ながら）どちら様で？

アンリエット：（きっぱりと）お父さま、こちらはアンリ・フレモンさん、私の婚約者です。

デュブル：妻よ、これはどうしたことかな？

アンリ：デュブルさん、なんて変わりようだ！ おお、どうか私に……。

デュブル：黙りたまえ。君は恐れ多くも娘に求婚したのかね？

アンリ：（デュブール夫人に）奥さま……。

デュブール夫人：（狼狽して）ああ、アンリさん、私どもの地位が、富が……ロシアの王子が……それにニコライ皇帝が……。

デュブール：アンリくん、わが家に対する貴君のご厚意には感謝申しあげる。君の献身ぶりはわしも理解しているつもりだからだ。そして今宵はその恩返しをさせていただこう……。だが、わしは帰国の前に、娘の結婚相手を決めてしまったのだ。だから、ご理解いただきたい、貴君にはすまないと思っていることを……そして、わしらは百万長者であることを。

アレクシス：そして我こそはアレクシス・サルシフィコフ王子であり、友人らによるなら、わが祖は……。

アンリエット：（椅子のうえに崩れ落ちながら）おお、お父さま、私を殺そうというの？

アンリ：デュブールさん、死に瀕している天使を哀れだとは思わないのですか？ 貴殿が野心さえ抱かなければ、私の慎ましい財産でも彼女は幸せを見いだしていたのに！

デュブール：持参金がカリフォルニアとくれば、娘も慰められましょう、アンリさん。執拗な懇願は礼に反しますぞ。王子よ、思いもよらぬこの騒ぎをどうかお許してください。

アレクシス：許す！

アンリエット：助けて、お母さま！ お母さまったら！

デュブール夫人：娘や、私たちは百万長者なのよ。

アンリ：（力強く）ああ、デュブールさん、奥さま、お気をつけなさい。幸福とは、銀で裏打ちされるものでも、金で織られるものでもないのですぞ。そしてカリフォルニアからやって来る財産など、気まぐれな運命の輪に乗って回っているようなものなのですから……。

デュブール：もう一度言おう、アンリくん、黙りたまえ。さきほども謹んで申しあげたとおり……。

第26場

デュブル夫人、アンリエット、ポール、マルグリット、デュブル、アレクシス、アンリ、カトリーヌ、クララ

カトリーヌ：(舞台奥からいきなり入場) ああ、なんて不幸！ ああ、なんて幸福！ ああ、なんて不幸！

アレクシス：(固まって、独白で) 伯母だ！ (ふり返り、クララと鉢合わせ) 従姉妹だ！ 両側から炎に挟まれちゃった。ずらかろう！ (退場しようと舞台端まで行くが、叶わない)。

デュブル：それはなんだ？

カトリーヌ：さきほどご主人さまから預かった手紙です……。

デュブル：そう、わしの手形を割引いておけと銀行に伝えていたのだ。

カトリーヌ：まさしく！ ですが、みなさん、こんばんは。店は閉まっていました。

デュブル：(呆気にとられ) 閉まっていただと！ エドワルド商会が！

アンリ：なんと、エドワルド商会だって！ あそこは支払いを停止したばかりですぞ。それもただの倒産ではなく、偽装倒産をしたのです！ (デュブルは茫然自失し、倒れる)。

アンリエット：お父さま！

デュブル夫人：私たちはまた破産したの？

デュブル：完膚なきまでの、そして決定的な破産だ。わしの株はすべてあそこに預けてあった。アメリカ中の銀行がこの倒産に巻きこまれるだろう。

カトリーヌ：怒れる者久しからず^{おこ} (1) ！

アンリ：(少しの沈黙のあと) アンリエットお嬢さま、私たちにまた運が回ってきました。

アンリエット：ええ、そうね。お父さま、私に任せてくださいな、強い気持ちと愛情でお父さまをまた幸せにしてみせますから。

デュブール：(アレクシスに) ド・サルシフィコフ殿、もはや貴殿に望みを託すほかありません。

アレクシス：デュブールさん、貴公と……知り合ったのは……間違いだった。
(独白で) ずらかろう！

クララ：(彼を見て) ああ、なんてこと！ この顔には見覚えがあるわ。

カトリーヌ：(同様に) 思うに、この面は納戸でも⁽²⁾ 見ている。

デュブール：身に余る……光栄……ですが……(独白で) ずらかろう！

子どもたち：ロシアの王子さま、行っちゃダメ、行っちゃダメだよ。お菓子をくれるって約束したじゃないか！(アレクシスを座らせ、膝に飛び乗り、鬚や髪を引っばると、カツラを手にする)。

カトリーヌ：(叫び声とともに) なんてこった！ こりゃ、私の甥だ、ゾツテントット族⁽³⁾ にエスカロップにされた⁽⁴⁾ 私の甥だ！

アレクシス：バレた！

クララ：(彼のもとに走り寄って) 従兄弟だわ、あたいの従兄弟だわ！

デュブール夫妻とアンリエット：甥！ 従兄弟！

アンリ：(炊婦を指しながら) ああ、ああ、ということは、閣下はこちらのエカチェリーナ [カトリーヌのロシア語読み] 大帝の後裔で？

カトリーヌ：やっと捕まえたわ、この悪党め！ 王子さまごっこなんかしやがって！

アレクシス：(当惑して) 俺じゃない、このお方だ、俺を王子と呼んだのは……。

デュブール：(同じく当惑して) そして、このお方だ、わしを男爵と呼んだのは……。

カトリーヌ：ええ、あんたがたは、うまい話に蚊が刺した点で⁽⁵⁾、どちらも煮たり焼いたりです⁽⁶⁾、諺の言うとおりに。けれど、どうせお前は食器を洗うがごとし⁽⁷⁾で、私に返す百エキュさえ持ってないだろう？

アレクシス：伯母さん……人の運命と水の流れは変わりやすいものです。

アンリ：さあさあ、デュブールさん、子どもじみた夢だったんですよ。大人として目を覚ましてください……。貴殿は影を人ととり違え、木偶の坊を

ロシアの王子ととり違えたのです……。一日のうちに貧しさと豊かさを二度味わい、カリフォルニアの城になどなんの値打ちもないことを今やご存じだ……。失ったものなどにもありません、貴殿には分別と、そして家族が残っているのですから。

カトリーヌ：（隅にある小箱を取りに行っていた。わざとずる賢そうに）ご主人さまはご出発のとき、この小箱を奥さまに預けていきました……。思うに、お宝が入っているのはこの中のはずですわ……。小さなつづらに大盆小盆⁽⁸⁾ってね。

デュブル：（小箱を手にとって）この箱に？ 覚えがないな。

デュブル夫人：もしも、ひと財産入っていたら！

デュブル：（小箱を開け、コンパス、定規、下げ振りなどを取り出す）わしの大工道具！（酔いから醒めた男のように、力強く、自信を持って）ああ、これぞ確かにお宝だ。逆境と破滅に立ち向かうためのお宝だ。知恵、忍耐、労働。神よ、讃えられよ、この一条の光に！（道具を胸に押しあてて）私は元の仕事をとり戻し、二度と手放しはしまい。これこそが真の富なのだ。

アンリエット：（その腕のなかに飛びこんで）おお、ありがとう、ありがとう、お父さま！

デュブル：アンリエット、手を。アンリ、君も。（彼はそれをひとつにする。アンリはデュブル夫人に手をさし出す。家族が集まる）

アンリ：これこそが揺るぎない幸福です。

デュブル夫人：（泣きながら、独白で）少なくとも結婚のお祝いにカシミアは残るわ。

カトリーヌ：で、クララ、一文無しの従兄弟をどう思う……。おまけに髪もないけれど？

クララ：（アレクシスに手を預けて）こんな彼が好きなんだもん！

カトリーヌ：かくなれば、アレクシス・ド・サルシフィよ、みな喜びに沸く今、ポトフも喜びに沸いているか見に行っておくれ〔サルシフィは「西洋ごぼう」の意でポトフの具材のひとつ〕——そんでもって、覚えておき

ましよう、校庭⁽⁹⁾に住むのが最善ってわけじゃないことを。(デュブールを見て)そして、転父苔を生ぜず⁽¹⁰⁾ってことをね。

完

カトリーヌの言い替え

n°	Page	カトリーヌの台詞と日本語直訳	元の諺や慣用句
(1)	270	Les ours se suivent et ne se ressemblent pas. 熊は続くが同じ熊はいない	Les jours se suivent et ne se ressemblent pas. 日々は続くが同じ日はない
(2)	270	revient comme un recors 役人の助手のように戻ってくる	revenir comme un écho (?) こだまのように戻ってくる
(3)	271	les Zottentots ゾツtentott族	les Hottentots ホツtentott族 ^[2]
(4)	271	mon neveu, qui a été escalpé エスカロップ（薄切り）にされた甥	scalper 敵の頭皮を剥ぐ ^[3]
(5)	271	l'occasion fait le marron. 機会が栗をなす	L'occasion fait le larron. 魔が差す（機会が泥棒をなす）
(6)	271	les œufs font la paire. 卵が組になっている	Les deux font la paire. 似た物同士
(7)	271	gueux comme Job ヨブのような乞食	pauvre comme Job 赤貧である（ヨブのように貧しい）
(8)	271	Dans les petits peaux sont les bons enfants. チビの奴はよい子ども	Dans les petits pots sont les bons onguents. 山椒は小粒でもぴりりと辛い（よい薬は小さな箱に入っている）
(9)	271	la maison du dehors 外の家	la maison d'or 金殿玉楼
(10)	271	père qui roule n'amasse pas de mousse 転々とする父は苔（=財産）を集めない	Pierre qui roule n'amasse pas mousse. 転石苔を生ぜず

ページは、本作の初出であり、本邦訳の底本とした「家庭博物館」版 (*Musée des familles : lectures du soir*, 2ème série, tome 19, 1851-1852, pp. 257-271) のそれを示す。

[1] ブラックなジョークにしてもとっぴな印象を受ける。カニバリズムはヴェルヌに一貫するオペセッションのひとつであるとはいえ。あるいはジョナサン・スイフト「穏健なる提案」（1729年）への目配せとしても唐突さは否めない。そのあとの「農民を開墾する……」も同様であることを考えると「農民 (paysans)」になにか別の意味を持たせているか、なんらの駄洒落か。

[2] もちろんアフリカのコイコイ人とアメリカ先住民は無関係。

[3] 第1場に既出。